

十二月

うた ゆかり
詠の由縁

十二月朔、暮れ方からしぐれる。

此年も残すところわづか、來し方を思うことしきり。家内が病床に伏して六年餘、おもへば憂きこと多い一年だった。

思い侘び山茶花にしぐれ聴きく夜かな 源

世をかこつ身に時の流れは餘りに速く、おとないは窓邊を過よぎる鳥影ばかり。宗祇の句しみじみ思いおこさる。おもへば宗祇が詠じた「時雨」が「袖を濡らす涙」に懸けられていることに想いを致したのは既に五十路を越へたこと。其れで漸く山頭火の哭声聲が心に滲みだ。己が浅慮を唯々恥ぢし入る許りだ。

しぐれるや死ななぬでいる 山頭火

世にふるもさららに時雨のやどり哉 自然齋宗祇

宗祇はさすらいの身を歎じている。

「世に経る」は身にうつろふ時。流れ過ぎる時をたゞ手を拱こいで見おくるほか無い哀しみ。降ると見れば歌み、歌むと見れば降りしきる時雨は「定め無さ」の象徴。

さしづめ「時雨のやどり」はたまゆらの住まいか。

宗祇は此の句を信濃の假寓で詠じた。句には「あつまに下りて」と詞書ことばがきが添そへられている。天下一の連歌師。北野連歌會所奉行に任じられ、勅撰集に準ずる新撰菟玖波つくば集の編に當つた宗祇だが、宮中で催される連歌の會には「出所卑し」とされついで招かれることは無かつた。ならば此の上は唯ひと筋、風流を尋ね行き行かんと心定めたに相違あるまい。

一時代たゞ一人に許される連歌師の稱號「花の本」を得ていた宗祇を、諸國大名は競って己が連歌の席に招じた。時は應仁の亂のさなか。將軍家の家督をめぐる細川勝元と山名宗全の争いは熾烈を極め、戦火が度々京みやこを蹂躪した。信濃假寓は風雅を求める許りで無く、騒亂を避けてのことやも知しれぬ。

因みに「世にふる」という詞が際立っていて廣く識られるのは小野小町の歌詠。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

小町が詠じている「花」は「人の世」。「色」は「人の心」を差す。

如何ばかり美しく咲き盛る花も遂には萎れる。鮮やかに染めあげた布もいつかは色褪せる。さながら「人の世」が、「人の心」がうつろふように。

呵責無く流れ去る時。己れひとりかひとつ處にとどまっている。自分だけが世間から相手にされ

ず置き去りにされてゆく。其れを小町はかこち嘆く。

世にふるはくるしきものを槓の屋に易くも過ぐる初時雨かな 讃岐

二條院讃岐は、歌の手練れとして知られた源三位(げんさんみ)頼政の娘。

「易くも過ぐる」は、逼塞する身の上を安んじさせる、「いたはるように」と云うほどの意味か。頼政は禁裏に夜な夜な出没する物ノ化「鶴」を射殺した剛の者。老いの身も構はず以仁親王(もちひとしんのう)を奉じ平氏追討を圖り、事終(ことしま)いて宇治平等院に自裁し果てた尊王の武士。讃岐は時に利あらず世を追はれた父を悼み歌った。

わが袖は潮干(しおい)に見へぬ沖の石の人こそ知らねはくまもなし 讃岐

もうひと昔以前になるが、若狭に旅し三方五湖を巡った際、山路が海に果てる高みから「沖の石」を俯ろした。時折り雪さへ舞う鈍色の北國(ほくこく)の空。暮れなづむ若狭の海。身も竦むような濃い藍に黠々と浮きつしづみつする「沖の石」は、なるほど胸衝かれるものがあつた。

いとほるゝわが水際(みぎわ)には離れ石のかゝる涙にゆるぎげぞなき 頼政

越前若狭は源頼政の所領。讃岐は父に倣い「沖の石」を詠んだ。「時に利あらず」世を去つた父を悼み嘆いた讃岐の口惜しみが宗祇の氣持を洩(ゆ)すつたのやも知れぬ。芭蕉は此うした歌の由縁を辯(ま)へた上で宗祇の句を借りた。

世にふるもさらに宗祇がやどり哉 虚栗

「時雨」を一語「宗祇」と置き換へたゞけの借句だが、後世の俳諧数奇の評は「手練れて巧みに尽きる。其れにしても芭蕉は文藝に關はる深い知識、教養を一體何處でどのように身につけたのか。

桃青、松尾芭蕉。本名、松尾忠左衛門宗房。

寛永廿一年、無足人松尾與左衛門の次男として生まれた。

此處で少しく「無足人」に觸れておく。無足人は身分こそ士分だが俸禄は支給されず、多くは營農で暮しを支へていた。

藤堂高虎は関ヶ原の軍功を評され慶長十三年、伊豫板島廿萬石から伊勢卅二萬石に轉封される。幕府は江戸から京まで、東海道筋の藩配置を譜代大名で固める方針をとつた。外様の藤堂藩に、京に近い伊勢が封地として與へられるのは極めて異例だつた。徳川家康が如何に藤堂高虎の關ヶ原の軍功を評価したか伺い知れよう。

新藩主藤堂高虎は本城を津に置き支城を伊賀上野に構へる。伊賀上野一帯は中世以來土着する地侍が先住していた。新藩主になり地侍たちは、或いは土地を離れ他家に仕官し、或いは刀を捨

和歌、漢詩に精通するようになったのだろうか。
つた

芭蕉野分して盃に雨を聞夜哉

延寶八年。芭蕉卅七歳。隅田川を渡った深川村に隠棲する。

俳諧社會は利得を求め俳諧宗匠、點者が蠢めきまはる低俗極まりない世界だった。俳諧宗匠は不特定多数の俳諧愛好者が持ち寄る連句の巻きに點を付けることにより支払はれる點料、俳諧愛好者が催す連句會に出席し、連句の運びを指導する出座料で生計をたてた。

點料は百句を連ねる百韻連句が一卷につき叅百文。卅六句の歌仙は百文。出座料は一回千文のきまりだった。因みに一文は現代の甘圓前後。當然ながら俳諧教奇が多いほど暮らしが潤う。

點者のあいだで客の争奪が行はれた。人氣を得んが為に點を加減するのは日常茶飯事だった。文藝にほど遠い俳諧社會の實際が芭蕉には耐へられなかった。みづから求めた深川隠棲。郷里伊賀上野を出奔して以來、世に出るのを只管念願した芭蕉が、世を去ることにより名を挙げるのは皮肉と云うべきだろう。

茅舎ノ感

櫓の聲フうって腸はらわた水ル夜やなみだ

武蔵曲

右に挙げた句はいづれも零落した俳諧社會に見切りをつけて深川に隠棲した頃の句。「肩肘曠からせて」と嘲う者もいよう。しかし切れの良い漢詩の諧調が、隠棲する心底にともすれば「つくばい」がちな女々しさを払拭し、最早一步も後に引かぬ覺悟が窺へて清々しい。

巷間流行する點取俳諧を淺ましいと他人事のように冷笑する資格は芭蕉には無かった。己もまた蔑まれて仕方の無い點者のひとりであった。心に添はぬまゝ出向いた俳席は数へ切れない。句會を仕切る清書所の連中の世話にもなった。世間を卑しいと輕蔑するのは天に唾するようなものだ。誰を怨むことも無い。つまりは俳諧に人を打つ力が不足している。己れの文藝が非力なのだ。

山を動(とよませ巖を碎き、読み手の心を打ちのめす俳諧を是非にも思案するのだ。芭蕉は其う心に決めていた。夜半雨戸を開ければ、大川を隔て、江戸市中の灯りが擴がる。淋しく無いと云へば嘘になる。だが空疎な賑はいに未練は無かった。

芭蕉の「世にふる」には俳諧新風をまさぐる野心が漲っている。陋屋に独居する芭蕉の齒ざしりが聞こえて来る。時雨が慰めているのは風雅にほど遠い、俳諧新風の確立にはやる騒々しい苛立ちだ。

芭蕉の「宗祇がやどり」の句には、俳諧を文藝に番からしめようとする決意が漲っている。

安手の笑いで氣を惹く談林俳諧や、言葉を操るだけに走る宗因風と訣別し、俳諧を文藝として確立すべく「冬の日」に激しく傾斜してゆく「宗祇がやどり」の句ほど自分を熱く鼓舞するものは無い。

宗祇が生きた室町時代。二百年下つて芭蕉が生きた江戸前期寛永から元禄時代。新聞社も出版社も無く、文學賞も無かった。もとより原稿料を払う者などいる筈も無かった。粗衣をまとい破

て商人となり、少なからぬ者は農に従った。新藩主は此うした舊來土着の勢力を慰撫するため主だった家柄に苗字帯刀を許し士分として處遇する。此れを無足人と呼ぶ。

松尾家は柘植七黨に属していたが主流筋では無かった。處遇は無足人であつたと史家は見る。

家柄は松尾家末流、しかも與左衛門は長男でも無く、士分には洩れたと見るのが妥當だろう。驅て松尾與左衛門は柘植郷から上野の町中に轉居し、上野白風城の東側、赤坂町に居住する。古地圖に従へば赤坂町の住人はすべて農人。農人とは百姓のことだ。

芭蕉の幼少期の史料は残っていない。十代の末から十九歳頃、藤堂藩伊賀付き五千石の侍大将藤堂新七郎に臺所方として出仕したと傳へられている。出仕に就いては諸説あるが、臺所方と云つても料理人に過ぎなかつたとの説があり、概ね當を得た推理と云へる。

二代目市川團十郎は日記「老いの樂」に左の記事を書き留めている。

芭蕉翁は藤堂和泉守様家來藤堂新七郎殿の料理人のよし笠翁物語

享保廿年 二月八日付記事

笠翁(りゅうおう)とは蕉門の俳人小川破笠(りつ)。

若い頃から芭蕉庵に出入りし、其角や嵐雪等と共に蕉風の興隆に心を砕いた俳人。或る折り芭蕉庵で「自分は藤堂新七郎の料理人であつた」とみづから語つたという。

いづれにせよ卑しい無足人の二男が自身の武家に奉公出來たのは俳諧が取り持つ縁であつた。

歴史上、俳諧が興隆するのは室町中期。戦國時代に少しづつ普及し、戦乱の世が終はる慶長元和の頃、諸文化の目覺ましい復興の波に乗つて全國的な普及をみる。

宗房が青年期にさしかゝる頃、京都に俳人松永貞徳と其の門下が活躍していた。京に近い伊賀上野はいち早く貞徳等の俳諧普及活動の影響を受けた。上野城下には中央俳壇から刊行される俳諧集に入選する者もいた。其うした俳諧数寄連中のなかの窪田政好、安川一笑等に宗房は句作の手ほどきを受けた。

宗房の奉公先藤堂家の嗣子新七郎も俳諧を好み蝉吟の俳號を持つほどだつた。

蝉吟は町の有力な俳人たちを屋敷に招いた。富裕で素性の良い窪田正好と安川一笑は蝉吟の俳席の常連だつた。宗房が蝉吟の許に出入りするようになるのも、おそらく政好、一笑等の推挙によると見てよいだろう。

しかし寛文六年、宗房廿三歳。敬愛し頼みにもしていた新七郎蝉吟が廿五歳という若さで病に倒れ夭折する。

因みに奥の細道立石寺の絶唱「閑かさや巖にしみいる」の蝉は何蝉か、夏が長(た)けていない季節からすれば油蝉ではあるまいなど、俳諧数奇は論議するようだが、心から慕つていた蝉吟藤堂新七郎を偲んでのことだという説があり充分に頷ける。

寛文十二年、宗房廿九歳。伊賀上野の菅原社天満宮に「貝おほい」を奉納し江戸に下る。

士分とは名ばかり、俸禄も支給されずわづかな田畠を耕し日々を凌ぐ貧しい無足人の家に、古今の和歌を収めた歌學書をはじめとする文藝書、漢詩を網羅した漢籍が所蔵されていた筈は無い。松尾忠左衛門宗房、後の芭蕉は一體何處で数々の書籍を通讀し、どのような人物に指南を受け

れ蓑笠で雨風を凌いだ。憩うべき團欒を擲ち、娶らず、子を愛ぐはしむことも無く詩人たちは旅に明け暮れた。

詩人たちは、たゞ楽しみを為だけに詩を詠じたのだ。

冬の夜長に詞の由縁を思いめぐらせば涯し無く物狂ほしい。自分は山茶花の繁みに時雨を聴きながら、老い怖れまい、老いを恥じまい。志かたく生きるべしと改めて決心した。

深更に至り時雨が雪にかはり初雪となった。

山茶花の紅濃きほどに春遠し 源